

「私は聖霊を信じます」

ヨハネ14：16－17 使徒信条V

堀田修一 22・10・9

- I 使徒信条は、三つに区分できる。1. 父なる神と、私たちの創造について。2. 子なる神と、私たちの贖いについて。3. 聖霊なる神と、私たちの聖化についてである。
- II 本日は、使徒信条の最後の三区分局の内容を掘り下げたい。
1. 「私は、聖霊を信じます」。父と子と聖霊は、神であり、三つの神ではなく、一体の方、一つの神である。「父と子と聖霊の名（原語は単数＝一体の方、一つの神、一人の神を示す）において彼らにバプテスマを授け」マタイ28：19。私たちは、聖霊は、ただの力ではなく、人格のある神と信じる。→「父はもう一人の助け主をお与えくださり」ヨハネ14：16。聖霊なる神のことが「もう一人の助け主」と呼ばれている。これは、聖霊が人格を持っておられることを示す。※異端の「エホバの証人」は、御聖霊について次のように教える。「油としてイエスにそそがれた聖霊について言えば、この霊は位格ではなく、神の活動力です」と教える。これは、聖書的ではない。「モルモン教」は、聖霊について「物質のうちの最も純粋なもの、一種のエーテルのようなもの」と教える。これも聖書的ではない。御聖霊が神であると教えているみことば＝「アナニヤ。なぜあなたはサタンに心を奪われて聖霊を欺き…どうして、このようなことを企んだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ」使徒5：3，4。「私たちはみな…栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主（ヤハウエなる神、主）の働きによるのです」Ⅱコリント3：18。聖霊は、御父や御子と同様に永遠の神であられる。この方は、私たちの心に内住する方であり、信仰によりキリストのすべての恵みに私たちを与らせ、私たちを慰め、永遠に私たちと共にいてくださる素晴らしい神。
2. 「きよい共同の教会」。「きよい、聖なる」＝神がきよめ、主の十字架の血で贖い(買い戻し)聖別し、神のものとされ、取り分けられた教会。「神がご自分の血をもって買い取られた神の教会」使徒20：28。「共同の教会」。その意味は、キリストにおいて一つに集められ、ユダヤ人も異邦人も共に含む神に近づく集団（主を信じる者の集まり）、世界中の聖書的な教会を含む共同の教会。使徒信条の「聖霊を信じます」の部分に「きよい共同の教会を信じます」があるのは、意味がある。それは共同の教会と御霊の関係が次のみことばで分かる→「わたしたちはみな、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマ（主を信じる人の心に聖霊が内住される聖霊のバプテスマ）を受け、一つのからだとなりました（主のからだなる教会に一つとされた、共同の教会に加えられた）。そして、みな一つの御霊を飲んだのです」Ⅰコリント12：13。目に見える地域教会に加わる聖なる儀式が洗礼、バプテスマ。現在、日本のある教会、世界のある教会を分裂させたり、結果的には、信徒の人々を、各教会から引き抜き、自分たちの教えの集会に招いている教えがある。霊的な目を覚まして、66巻の旧新訳聖書と聖書を教えて下さる御聖霊に頼り識別できるように祈りたい。表面的には見分けにくい。かえって、ある方々には魅力的である。その根底にあるのは「ディスペンセーシ

ジョン（7つの聖約期に時代を区分する聖書理解、教会とイスラエルを区別して聖書を理解する）主義神学」である。信頼できる多くの神学者は、この神学を指示していない。※この神学の教職者の方々が皆、他の教会を混乱させているわけではない。しかし、ある指導者の方は確信を持って、今存在している各地の教会を「霊的に革命しなければならない」という信念を持っておられる。その影響で、その方によるDVDやYouTube等で学びをした方々（日本各地に約70の集会がある）は、使命感を持って聖書信仰の各教団、連合の各教会に集い、信徒の方と親しくなり、自分たちの学びの集会に誘い、結果的には、各教会の人々が、各教会から出てしまう痛みが今、日本の色々な聖書的な教団の教会で起きている。今、JECAでも正しい対処を話し合い、祈り求めています。祈って下さい。今、私は、地区運営委員長として地区を正しく導くために、聖書と神学をもう一度、深く学ばさせられています。その中で、理解させられていることは、「きよい公同の教会を信じます」とは、自分が所属する主の教会、連合だけでなく、他の聖書信仰の教団、教会を神が贖われた教団、神の教会として尊重しますという信仰告白だということです。高慢になり、他の聖書に立つ教団、教会を「霊的に改革しよう」という上から目線の態度こそ聖書的ではない→「偽預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。あなたがたは彼らを実によって見分けることとなります」マタイ7：15, 16。その実とは、「もし、だれかが神の宮（教会）を壊す（分裂させる、間違っただけでかき回す）なら、神がその人を滅ぼされます。神の宮（主の教会）は聖なるもの（神が買い取られた神のもの、聖なる公同の教会）だからです」Ⅰコリント3：17。※ディスペンセーション（時代区分）主義が聖書的でない特徴的な神学は、①主が十字架で死なれる前に教えられた山上の説教、主の祈りは、キリスト者に語れたのではなく、ユダヤ人向けの新しい律法という考え方。②主の最初の空中再臨は患難時代の前に教会（キリスト者）だけが引き上げられ（携挙）、患難時代の間に、ユダヤ人の中に悔い改め主を信じる者が起こされ、主が地上に再臨され救われるという教え。これは、「キリストは、この二つ（ユダヤ人と異邦人）をご自分において新しい一人の人造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだ（主の一つのからだ＝教会）として」エペソ2：15, 16の教えと矛盾する。

3. 「聖徒の交わり」。使徒信条の三番目の「聖霊を信じます」の部分に「聖徒の交わり」があるのは、意味がある。それは、次のみことばに答えがある。「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように」Ⅱコリント13：13。礼拝の最後の祝祷の土台となっているこのみことばと関係している。主を信じる私たちの心の中に内住される聖霊は、縦の関係である神との交わり、祈り、礼拝を霊的に生きたものとされる。そして、横の関係である主を信じる聖徒同士の主にある親しい交わりを生み出して下さる。交わりの本質的は、主の恵み、みことばで教えられた恵みを分かち合う交わり、聖霊からいただいた賜物を分かち合い、賜物を用いて主の教会を建て上げる交わりである。聖霊による交わりによってのみ、教会は一致を保つことができる。
4. 「罪の赦し」。これが、使徒信条の「聖霊を信じます」の部分にある意味。私たちは、自分の罪に気づかせて下さる方がおられないと罪の赦しを神に求めない。聖霊は、私たちの心の中におられ、私達と交わり、罪を教え、主を信じる信仰と罪を認める告白へ導き、神の完全な赦しをいただくようにされる。主が十字架と復活により成就された救い（罪の赦しと永遠の命）を私たちの心に届けて下さるのは御聖霊の役割である。私たちは、自分の罪の赦しへの感謝と御聖

霊により聖なる歩みに導かれる。

5. 「からだのよみがえり」。私たちの魂は、私たちが生涯を終え死を迎えると、天国、主のみもとに迎えられます。それだけではなく、主が、神の時にこの世に再臨されるとき、私たちに栄光のからだを与えられ、私たちの魂と結び合わされ「ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます」ピリピ3：21 その御業をされるのは聖霊。Ⅱコリント3：18。「御霊に属するからだによみがえらされる」Ⅰコリント15：44。

6. 「永遠のいのちを信じます」。主を信じる私たちが、現在も永遠のいのち（神を深く知る交わり）の恵みを受けており、天国に行っても永遠の命、神に愛され神との交わりの祝福を受け、主の再臨後も新天新地で永遠のいのちの完全な祝福を受け、神を永遠にほめたたえるようになるのです。黙示録5：11－14、7：9－12。

祈り：「使徒信条」の意味を噛み締め大切にし信仰告白をし福音を証しさせて下さい。